

《教員の活動・研究から》

西カリマンタンに見る 中国伝統の行事 Cap Go Meh

特任准教授 サフィトリ エリアス

多くの民族の持つ文化の多様性が、統一を目指すインドネシア共和国の抱える目立った特徴であると言えます。「多様でありながら1つになる」これは“多様性の中の統一”(Bhinneka Tunggal Ika)を表した言葉そのものです。

筆者の研究対象のひとつは、インドネシアの中の伝統中国文化であり、この寄稿もそれに関連したものです。西カリマンタン州は、ムラユ族、ダヤク族や中国系の人たちが住み、それぞれの文化が色濃く混在しています。この州が研究の格好の現場として選ばれるのは、各種族が一緒に力を合わせ文化的行事(例えば、竜のパレード)に取り組んでいる姿が見られるからです。フィールド研究は、映像を記録したり、情報を提供していただける方にインタビューしたりすることが主になります。

“知らなければ愛せない”ということわざがありますが、ここで筆者は Cap Go Meh の伝統について説明させていただきたいと思います。中国恒例の大きな文化行事でありまして、西カリマンタン社会でもみんなが楽しみに待ち、国内外の観光客も注目を寄せています。

この原稿は、中国の伝統文化の保存・継承を積極的に進めておられる F.X.Asali 氏にお会いし、その時のインタビューをまとめた解説とご理解ください。同氏は当地の社会的な名士であり、文化評論家でもあります。

Cap Go Meh という言葉は、中国の福建語が起源と言われ、Cap go は“15”、Meh は“夜”の意味です。

ポンティアナクで、中国伝統文化の保存活動に取り組んでいる Asali 氏から話を聞く筆者⑤
=2014年9月



「15日後の夜」は陰暦新年のお祝いを行います。中国ではこのお祝いを「元宵節」と呼んでおり、“正月の夜のお祭り”となります。

古代の文書によりますと、Cap Go Meh についての始まりなどは2通り説明されています。

- 1) 元宵節は新年の祝いを終えた後に迎える祭り。漢王朝の前期(紀元前 206 年～紀元 24 年)から行われていた。
- 2) 周王朝時代の(紀元前 770 年～紀元 256 年)頃に、正月の 15 日に農民たちが田畑を荒らす動物を脅したり、害虫などを追い払ったりするために、たくさんの提灯を取り付けていた。農民たちは提灯の中の火を注視。火の色の変化で天候がどうなるかを予測できると信じていたようだ。この 1 年、乾季が長く続くのか、降雨量が多くなるのかもこれで知ったという。



西カリマンタンで行われている Cap Go Meh の行事には、竜のパレード、獅子舞(Barongsai)、老爺(Lauya)や修験者(Tatung)=写真=と呼ばれる中国の呪術能力を誇示するようなアトラクションも含まれています。パレードをする意味は、災いを阻み、雰囲気を盛り上げさせるためでもあります。

以上、中国の伝統行事が西カリマンタンでインドネシアの地方文化として知られるようになった概略です。